

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

五年二組で、オシャレ戦争が勃発したのは、二学期最初の日のことだった。

「今日のテーマは、マーメイド。真鈴は、貝がらのヘアピン、花蓮は海色グラデーションのワンピース、そして私は、波を意識したふわふわのウェーブヘア。うん、カンペキ！」

始業式が始まる前、教室の真ん中で大きな声で演説をしていたのは、瑠璃羽ちゃんだ。まつ毛がくるとカールしている瑠璃羽ちゃんは、低学年の時からお人形さんのようでとてもかわいらしく、その美貌はお父さんお母さんの間でも有名なくらいだった。そんな瑠璃羽ちゃんが、きれいに波打った髪をツインテールにしていると、テレビの中のアイドルよりもずっと輝いて見える。

三人は、どうやら夏休みの間に新しいルールを作ってきたらしい。詠子は、瑠璃羽ちゃんの声からそれを悟った。

「私たち、これから、ファッションにテーマを持つことにしたの。毎日、放課後にテーマを決めて、次の日は、それぞれそのテーマに合った服を着てくるの」

聞き耳を立てずとも、瑠璃羽ちゃんのよく通る声は教室の隅々までしつかり届いた。

詠子たちの学校には制服がないので、詠子たちは毎日私服だ。詠子は、毎朝着る服を考えることが嫌いではなかったけれど、似たような服しか持っていないので、考えるまでもなくだいたいいつも同じような格好に仕上がる。毎日、テーマに合わせて服を選ばなければならないとなったら、さぞかし苦労するだろう。というより、不可能だ。

と、詠子がそんなことをぼんやり考えている間に、どうやらしいちゃんも同じようなことを思ったらしい。けれど、しいちゃんは、詠子よりも頭の中を口に出すのが早かった。

「めんどくさそー」

しいちゃんも声に出すつもりはなかったのかもしれない。そんなつぶやくような声だった。しかし、クラス全員がなんとなく瑠璃羽ちゃんの声に聞き入っており、耳に意識を集中させていたので、その声は思ったより多くの人に届いた

ようだ。

そして、瑠璃羽ちゃんもしっかり、その声をキャッチしていたらしい。瑠璃羽ちゃんは、よどみなく続けていた演説を一時中断すると、何事もなかったかのような表情で演説を再開し、しかし、その中でしつかりしいちゃんに返事をした。

「お洒落を面倒くさいって言う人もいるかもしれない。馬鹿馬鹿しいって思う人も。でも、そういう人って視野がせまいつていうか、きちんと自分のこと考えられてないんじゃないかな。だって、大人になったら、お洒落しないと逆に失礼になるんだよ？ スッピンとか、その場に合っていない服とかさ。ボサボサの髪の人と自分に合った髪形をきれいにまとめている人がいたら、絶対、きれいな人の方が信用されるしね。だから、今からお洒落に気をつかうことって勉強と同じくらい大切なことだと思うの。つまり、お洒落は身だしなみの一部ってこと。それを面倒くさいって言っちゃうのは、なまけ者じゃないかな」

①なるほど、と詠子は瑠璃羽ちゃんのスピーチに納得する。いつの間にかクラスはしんと静まり返り、みんな、瑠璃羽ちゃんの観客になっていた。そこで演説が終わっていれば、拍手が起こっていたかもしれない。

しかし、瑠璃羽ちゃんは、まるでスポットライトを独り占めしようとするかのように、そのまま続けてしまった。

「もし、わざと毎日同じ男子みたいな服着て、お洒落に興味ありませんってアピールするのがかっこいいとか思っている人がいたら、それってセンスないよね」

瑠璃羽ちゃんがそう言い終わるのと、しいちゃんがたつと音を立てて立ち上がったタイミングは、ちょうど同じだった。詠子は、はつとしてしいちゃんを見る。しいちゃんの顔が赤い。そして、それは怒りの色ではなく、恥の色であることが表情からわかった。

と、クラスがしんとしたその時。

まるでねらったかのようなタイミングでチャイムが鳴って、外でサッカーをしていた男の子たちがドヤドヤと教室に帰ってきた。それでその場合は、一度うやむやになったけれど、その中ですとんと腰を下ろしたしいちゃんの周りの空気の静けさは、まるで残暑に放り込まれた氷の塊のようで、詠子はひやりとした。

その日の帰り道、しいちゃんはしばらく口を開かなかった。詠子は、その場にふさわしいお洒落な言葉を探したけれ

ど、センスがないせいが出てこない。それで二人がとほとほと無言で歩いていると、やがてしいちゃんがポツリと言っ

た。②「……アタシ、別にわざとこういう格好してるわけじゃないんだよ」

詠子ははつと顔を上げる。しいちゃんの顔には、きまり悪そうな引きつった笑顔が貼りついていていた。「アピールとかしてるわけじゃないんだよ」

いつも元気で明るく、誰に何を言われてもものおじせず言い返す。そんなしいちゃんが、今回、何も言い返せなかった。そのめずらしさが、しいちゃんの心の痛みを物語っていた。

詠子は、うん、うんと何度もうなずく。しいちゃんが、二人の弟たちにお下がりをおあげるため、家族のためを思っで、かわいらしい服をあえてさけていることは知っていた。そして、みんなの中にある、元気で活発な女の子のイメージを損なうてがっかりされたくないという思いを抱えていることも。

「てか、うん、わかってるんだ。瑠璃羽が言ったこと、正しいよね。お洒落って、無理することじゃなくて、毎日の努力の積みかさねだし、必要なことだよ。アタシがめんどくさいって言っちゃったのは、たぶん、負けおしみたんだ。アタシには、できそうにないからさ。あー、カッコわるい、アタシ」

しいちゃんはとても早口になっていて、まるで次々に言葉を流し出すことで、③自分の中の嫌なものも吐き出してしまおうとしているようだった。詠子は、しいちゃんを内側から傷つけていくその言葉たちを止められる言葉を知らず、しいちゃんが口を閉じるのを待って、ようやく言った。

「私、しいちゃんのその格好、好きだよ」
けれど、

「ありがと、詠子」

④そう笑って返してくれたしいちゃんの笑顔はとても寂しそうで、詠子は今の自分の言葉がまったくお洒落ではなかったことを思い知った。

そして、さらにこまいったことに、事態は一日では収まらなかった。始業式の日には瑠璃羽ちゃんの演説に感銘を受けたクラスの女の子たちが、次の日からオシャレを始めたのだ。休み時間の話題は、常に誰かの服装や髪形のこと集中し

た。

「ねえ、私の今日のテーマ、なんだと思う？」

「そのシユシユ、どこで買ったの？」

「編み込みのやり方、教えてー」

クラスの女の子たちは、瑠璃羽ちゃんたちと同じように、グループごとに毎日テーマを決めて、朝、登校するとグループ内でお互いのファッションについて話し合い、お昼休みになるとちがうグループと意見や情報を交換するようになった。

そんな中、瑠璃羽ちゃんはファッションリーダーとしての地位を確固たるものにしていて、ファッションの方向性のちがいで、女の子たちが対立するようなことがあれば、瑠璃羽ちゃんの鶴の一声が場を収めるということも多々あった。瑠璃羽ちゃんの真似をし始める女の子も増え、先生たちは急に華やいだ五年二組のクラスにとまどい、服装について注意をするかどうか迷っているようだった。

問題は、そんな日々が続くうちに、そのファッショングループから脱落する女の子が増えていったことだった。最初の一週間は、みんな、家にある洋服を総動員して、様々なファッションを作り出しては、お祭りのように騒いだ。しかし、そのうちにレパトリーはつき、ほとんどの子は、毎日ちがうファッションをすることができなくなった。すると、それまで毎日楽しそうにオシャレの話をしていた女の子たちは、次第に休み時間に眉間にしわを寄せるようになったのだ。

「あの色の組み合わせ、おかしくない？」

「私も思った！センスないよねー」

「あの子の今日の髪形、気合入り過ぎてて逆にイタイよね」

それまで瑠璃羽ちゃんをお洒落の神様のようにあがめていた女の子たちは、いつまでたっても洋服のストックがつかない瑠璃羽ちゃんたち一派を痛烈に非難するようになった。

二学期のはじめから、このオシャレ合戦に参加していなかった詠子としいちゃんは、幸いなことに、この戦争に直接巻き込まれることはなかった。しかし、いつもならこのようなクラスのいざこざを中心になって収めるしいちゃんが、

今回ばかりはただ黙ってこまったように眉を下げていることが、詠子には心苦しかった。

お洒落ってなんだろう。

詠子は、そんなクラスの様子をながめながら考える。お洒落は身だしなみの一部、時と場合に合わせながら自分らしさを楽しむこと。そんな瑠璃羽ちゃんの言葉に、最初は詠子も感動していたはずなのに、今、こうして雰囲気が悪くなったクラスを中心にいる瑠璃羽ちゃんを見ても、お洒落だとは思えなかった。今の瑠璃羽ちゃんたちは、ただ身にまとう小物を増やし、毎日のテーマに合わせてごっこ遊びをしているようにしか見えなかったのだ。

クラスのどこを見ても、瑠璃羽ちゃんの演説の言葉どおり、身だしなみと自分らしさのために服を選んでいる人はいないように思えた。

お洒落ってなんだろう。

詠子はその日、家のマンションのエレベーターの中でもう一度、その問いについてぼんやりと考えをめぐらせた。しかし、答えを出せないまま、家の玄関についてしまう。

(中略)

「ねえ、おじさん。お洒落って何だと思う？」

「ん？」

クッキーをくわえて首をかしげるおじさんを見て、詠子はすぐに、自分が問いかけの言葉をまちがえたことに気がついた。おじさんの頭はボサボサで、眼鏡は大き過ぎて、カーディガンはよれよれのぶかぶかなのだ。おじさんは、お洒落の対極にいるような人だった。

「実はね」

詠子は、今の質問をなかったことにして、順を追って、今、五年二組で起こっているオシャレ戦争について語り始めた。

おじさんは、もともとクッキーを絶え間なく口に運びながらも、まじめな顔で詠子の話を聞いた。

そして、詠子が話し終えると、コーヒーをごくりと飲んでうなずく。

「なるほど、洋服が武器になっちゃったのか」

「うん。私も最初は、瑠璃羽ちゃんの話に納得していたんだけど、なんだか途中からやつぱりちがうんじゃないかって、もやもやしてきちゃって」

「なるほどねえ。出発点が正しくても、システムがおかしいと戦争になっちゃうんだろうね」

「システム？」

「そう。ルールって言ってもいいかもしれない。詠子ちゃんも瑠璃羽ちゃんも、お洒落が大切な身だしなみっていうゴールは共有しているんだけど、そこまでたどり着くまでの方法にちがいを感じているんじゃないかな。採点^アキジュンがちがうっていうか……。五十メートル走をするのに、ひとりが走って、ひとりが自転車じゃ、なんかちがうって思うでしょ？」

おじさんの言葉に、詠子はうなづく。

「で、今の瑠璃羽ちゃんのルールだと、洋服をたくさん持っている女の子が強いってことになるから、一部の女の子しかゴールに近づけない。それで、そうじゃない女の子たちがずるいなんて思って、瑠璃羽ちゃんたちがゴールに着かないように邪魔^{じゃま}をするから、戦争になっちゃっていると思うんだ。だから、みんなが参加できるルールに変えれば、クラスの雰囲気も変わるんじゃないかな」

「うーん、でも、その新しいルールがわからないだもん」

「そうだねえ、答えが決まっているものじゃないしねえ。あ、そうだ」

おじさんは、ふと思いついたようにうしろをふり返ると、そこにあるたくさんの紙束の中に手をつっこんだ。おじさんのお仕事の書類が積み重なっているエリアだ。

「あ、あった、あった、これこれ。参考になるといいんだけど……」

おじさんは、鼻の上をすべつてずれた眼鏡を直しもせずに、その眼鏡越しに分厚い紙束を見つめる。

「詠子ちゃん、ここで問題です。人間がお洒落を始めたのは、いつでしょうか」

おじさんは、クイズ番組の司会者のような調子でいきなり出題した。詠子は、見当もつかなくて首をかしげる。

「えっと、江戸時代、かな」

「ぶー。もっともっと前です」

「平安時代？」

「いやいや、日本から出よう。正解は、十万年よりもっと前です！」

おじさんは、1と笑った。詠子は、思ってもみなかった答えに目を見開く。平安時代や江戸時代と言われれば、なんとなく頭の中に人々の絵を思い浮かべることができると、十万年前と聞いても、詠子の頭にはまったく野原しか浮かんでこない。おじさんは、そんな詠子の心の内を知ってか、楽しそうに瞳^{ひとみ}を細めて続けた。

「アフリカの十万年前くらいの地層から、オーカーっていう赤い酸化鉄の塊^{くわい}が出土してるんだって。研究者たちがいうには、昔の人はこのオーカーから赤い粉をけずりとり、体にぬったり服を^イめたりしていたらしい。つまり、十万年前の人たちはお化粧^{けしょう}をしたり、きれいな色の服を着たりして、お洒落をしていたってことだね。その後、七万五千年前の地層からは、貝がらに穴をあけたビーズのようなものも見つかっていて、そこに紐状^{ひもじょう}の摩擦^{まさつ}のあとがあったことから、そのビーズは紐でつなげられて首飾^{くびかざ}りみたいになっていたんじゃないかと考えられている」

詠子の頭の中の昔の人が、赤い服を着て貝がらの首飾りをつける。そして、詠子の頭の中をうれしそうに踊りまわった。

「昔は鏡やカメラなんてなかったからね、そういったお洒落はかわいい自分を見るためではなくて、人に見せるためのものだったんじゃないかと想像できる。じゃあ、何を見せたかったのか。それは、たぶん、自分が人と同じだということ、もしくはちがうということだったんじゃないかな」

「え、正反対のこと？」

「そう。昔の人は、同じとちがう、この二つでなにを伝えたかったんだろうね」

詠子の頭の中の昔の人が、赤い服を着た人と首飾りをかけた人の二人に分かれる。そして、赤服の人と首飾りの人をそれぞれ増やしてみた。すると……。

「赤服族と首飾り族……？」

詠子は、自分の頭の中を讀んでそう言った。おじさんは詠子の頭の中を想像したのか、2と笑うと、うれしそうにうなづく。

「そう、同じとちがうは、仲間と仲間じゃない人だね。じゃあ、仲間とはなにか」

おじさんは、手に持った資料をぺらぺらとめくった。

「現在の地球上に生きている人間の中で、僕たちの祖先に近い生活を送っていると考えられている民族のひとつが、アフリカのカラハリ砂漠に住むサン族だ。サン族の女性は皆、たくさんの首飾りをつけているんだけど、それは全部、誰かからのプレゼントなんだって。自分が作ったものは、誰かにあげるんだ。つまり、首飾りが多い人ほど友だちがたくさんいて、こまった時に助けてくれる人が多いってことらしい。サン族の赤ちゃんは、生後三か月から半年の間に、親戚ひとりひとりから首飾りをもらうそうだよ。こまった時は助けますっていう愛情の証だね。サン族は、助け合いと分かち合いの精神を大切にしているんだ。それはたぶん、昔の人も同じだった」

詠子の頭の中で、赤服族と首飾り族が、それぞれ楽しそうに手をつなぎ、輪になって踊る。

「と、いうことはだ、詠子ちゃん」

おじさんが、持っていた資料を机において、ピンと人さし指を意味ありげに立てた。

「本当のお洒落は、今みたいに贅沢をすることじゃなくて、危機に陥った時に助けてくれる仲間の証し、仲間との絆を大切にすることなのかもしれない」

おじさんは、まるで謎解きを完了した探偵のように得意げな顔をして、詠子の反応を待っている。それで詠子は、頭の中で踊り続ける赤服族の人々と首飾り族の人々に別れを告げると、ふむ、と頭を自分だけのものにして考えた。

やがて詠子は言った。

「ありがとう、おじさん。ちよつと道筋が見えた気がする」

するとおじさんは、やさしくほほ笑んで、ようやくずっとずれたままだった眼鏡の位置を直した。

「しいちゃん、これ、あげる」

おじさんと話してから数日がたったある秋雨の日のこと、詠子はお昼休みに、みんなが教室に残っている時を見計らって、しいちゃんの席を訪れた。

「え、どしたの、これ？ 詠子が作ったの？」

しいちゃんは、詠子の突然のプレゼントに目を丸くしながら、案の定、詠子の二倍以上の大声でさげんだ。詠子は、

クラスの注目が、自分の背中にぐつと集まるのを感じる。詠子は、ドキドキしながらうなずいた。

「プレスレットにしようと思ったんだけど、アクセサリーすると先生に怒られるし、サッカーとかする時に引っかけたら危ないから、筆箱につけたらどうかって思っ」

「わー、ありがとー、かわいー、なにこれ、編んだの？」

「うん、組紐。結構簡単に作れるんだよ」

詠子がしいちゃんにわたしたのは、黄色とオレンジの刺繍糸を組み合わせで編んだ組紐だった。神社で売られているお守りについているような紐で、いろいろな色をまぜて、少し凝った編み方をする、ただの糸がかわいい紐に変身する。詠子は、組紐の編み方を研究していたのだ。

「うれしー、でも、なんで？ アタシの誕生日、年に一回だよ？」

さっそく筆箱の端に詠子の組紐を結びつけながら、しいちゃんは尋ねる。それで詠子は、おじさんから聞いた話をしいちゃんに話した。せっかくなので、詠子の頭の中で踊っていた赤服族と首飾り族のことも話す。

「あははっ、じゃあ、アタシ、**3** 族？」

詠子が話し終わると、しいちゃんは大きな口を開けて笑う。そして、ひとしきり笑うと、筆箱の先の組紐をつかんで、詠子をまっすぐに見た。

「ね、これ作るの、ほんとに簡単？ アタシにもできるかな？ 詠子の分、編みたい」

詠子は待っていましたとばかりにポケットの中から、刺繍糸と組紐を編むために使う段ボールの板を取り出す。しいちゃんは、用意周到な詠子の様子にもう一度笑い出すと、

「アタシ一人じゃ、族にないもんね」

と、うつむきがちに組紐を編み始めた詠子の指先を、じっと観察した。

⑧ その時、詠子の顔は赤かった。雨で外に遊びに行けない五年二組のクラスメートたちの耳が、自分たちの会話をしっかり聞いていたことを背中で知っていたからだ。

そして、長い秋雨の季節が明けたある日の午後、詠子は、学校から帰ると台所でコーヒーをいれ、おじさんのところへ向かった。

おじさんにコーヒーマのタンブラーをわたすと、ポケットの中から深緑色といくつかの大地の色を織りまぜた組紐を取り出した。

「これ、おじさんにあげる」

「ありがとう。仲間の証しだね」

詠子がすべてを語らずとも、おじさんはこの間の詠子の話を思い出して、その組紐の意味をわかってくれたようだ。

「うちのクラスではね、みんな、筆箱につけるの」

詠子は少し照れくさくなって、早口に続けた。

「瑠璃羽ちゃんと真鈴ちゃんと花蓮ちゃんは、青色でおそろいにして、ほかの子たちも仲のいい子同士、おそろいの色のを交換してるの。そしたら先週、瑠璃羽ちゃんがみんなに、五年二組みんなおそろいの組紐作ろうって言い出してね、組紐編むの得意な子が、何人か手分けして虹色の組紐をクラスの人数分、編むことになったの。男の子は嫌がるかなって思ったんだけど、今日配ったら、意外にみんな、筆箱につけてくれて。本当は、女の子たちがつけてるの氣になってたんだって」

おじさんは、詠子の話を聞きながら、うんうんと何度もうなずいて、詠子がわたした組紐を、おじさんがよく使っている赤ペンの先に結びつけた。詠子は、おじさんの指先を見ながらつけ加える。

「みんな、組紐編むのに忙しくなって、前ほどファッションのこと、氣になくなったみたい。なんか、瑠璃羽ちゃんのルールを勝手にぬり替えたみたいで悪いかなって思ったんだけど……」

言いよども詠子を前に、おじさんの瞳が少し不安げに揺れる。

それで詠子は首をふった。

「けど、ゴールはいつしよだもんね。瑠璃羽ちゃん、お洒落は身だしなみの一部で、時と場合に合わせる練習をなきゃいけないって言っていた。それって、同じ場所にいる人に、自分は仲間ですって教えることで、その人たちにこわい思いをさせないってことと同じかもしれない。それをうまく瑠璃羽ちゃんに伝えられたかわからないけど、でも……。瑠璃羽ちゃんがクラスでおそろいの組紐作ろうって、みんなに言った時、私、瑠璃羽ちゃんと一瞬、目が合ったような氣がしたの」

その時、詠子は思ったのだ。本当は、瑠璃羽ちゃんはいちちゃんに勢いで言い過ぎてしまったことを氣にしていたのではないか。図らずして悪くしてしまったクラスの雰囲気、直したいと思っていたのではないかと。

詠子はそう信じたくて、そのわき上がった気持ちを胸にとめるように、ぎゅっと両拳をにぎった。すると、詠子の頭の上の方から、

「よかったね、詠子ちゃん」

と、おじさんの、ひなたぼっこをした猫のような声が降ってきたので、詠子の肩の力はふっと抜けた。詠子はほほ笑む。

「ありがとう、おじさん」

おじさんは肩をすくめ、首をふる。

詠子は、言うか言うまいか迷っていたことを、この際、口に出してみることにした。

「おじさん、でも私、ちょっとこわいんだ」

ずっとボリュウムダウンした詠子の声の行く末を追おうとするように、おじさんの目が開かれる。

「みんなで組紐お洒落をできるようにになったことはうれしんだけど、私、もしかしたらまちがえたかもしれない。みんなの筆箱を見てみるとね、組紐をたくさんつけている子と、ちよつとの子がいるの。それから、すぐく立派できれいなお花の形の組紐を作る子もいれば、三つ編みしかできない子もいる。そのうち、高いビーズとかスパンコールをつけ始める人も出てくるかもしれない。そしたら、また戦争になっちゃうんじゃないかな。私、ルールを変えただけで、結局、新しい戦争を作っちゃっただけなのかもしれない」

詠子の言葉は不安で加速して、ぼろぼろと口からこぼれていく。詠子は、おじさんがそれを全部拾い集めて、きれいにまとめてくれることを心のどこかで期待していた。けれど、おじさんは詠子の言葉たちを拾わなかった。

「そうかもしれないね」

それは、おじさんが意地悪で言った言葉ではないと、詠子にはわかっていた。それでも詠子の胸は、とがったものをぐっと押し込まれたように痛む。

「でも、詠子ちゃん。人間は、進化するから」

おじさんは、詠子が床に散らかした言葉を遠くからながめるように目を細める。

「お洒落はね、協力のはじまりの形であると同時に、言葉のはじまりでもあったんだ」

おじさんは、この間と同じようにピンと右手の人さし指を立てた。

「お洒落は、仲間っていう目に見えない絆を、人に伝えるための道具だった。言葉は、そこから進化して、さらにいろいろなことを人に伝えるために作られたんだ。人間がいつから言葉を使っていたのか、はっきりとしたことはわからない。けど、多くのセンモンカは、かなり昔だったと考えているらしい。というのね、今から三万七千年くらい前に、人間が急に芸術に目覚めているんだよ。ドイツのガイセンクレストレという遺跡では、骨や象牙から作られたフルートが見つかっていて、フランスのショーヴェ洞窟では、ライオンや牛などの動物の壁画がたくさん見つかっている。人間はもともと前からアフリカにいたのに、なぜヨーロッパのその時代に芸術が急に現れたのか。長い間、その理由は誰にもわからなかった。けどね、ひとつの可能性は、人間の言語能力の向上にあるそうなんだ。十萬年前から三万七千年前の間に、人間の言語能力がのびて、どんどん目に見えないものを伝えられるようになった。そしてその結果、人は、芸術というもっと抽象的な気持ちの伝え方を思いついたんじゃないか、という説があるんだよ。これはあくまで仮説なんだけど、もし、この仮説が正しいとしたら、詠子ちゃん」

おじさんは、楽しそうに声を弾ませる。

「人間は、お洒落、言葉、芸術の順番で仲間との絆を深める方法を獲得していったことになる。だからね、詠子ちゃん。詠子ちゃんのクラスでも、次は言葉が来るかもしれない。詠子ちゃんの投げたお洒落のルールが誰かを傷つける前に、みんなが言葉を編んで、お互いに信頼の首飾りをわたせるようになるといいね」

そう言っておじさんは、詠子の頭をぽんぽんとでた。

詠子は想像する。確かに今回は、瑠璃羽ちゃんにもしいちゃんにも、そして詠子にも言葉足らずの部分があった。自分の中のものやを伝えるびつたりの言葉を、詠子たちがまだ知らなかったからなのかもしれない。

こうして、詠子の中で五年二組のオシャレ戦争が一応の終戦を迎えた次の日、詠子は学校で、不思議な体験をした。詠子が休み時間にお手洗いへ行行って帰ってくると、机の上に出しっぱなしにしてあった詠子の読みかけの文庫本に、一

枚の紙がはさまっていたのだ。

一見、しおりのように見えるその見覚えのない白い紙を、詠子は、なんとなくほかの人に見つからないようにおそるおそる取り出した。

それは、お習字の時に使う半紙だった。しかし、それは、普通の半紙の四分の一くらいの大きさで、角は丸く楕円の形をしている。そして、その真ん中には黒いサインペンでタテ書きに文字が書かれていた。

『古都村さんが、

組みもをあんてみんなをつなげたこと、

すごいと思いました』

それはまるで、国語の先生の板書のようにきれいな字で、その文字に乗った思ひは、詠子の心の中にとっても上品にやさしく流れ込んだ。

誰からだろう。

詠子は、ぱたんと文庫本を閉じてその手紙を隠すと、高鳴る胸の鼓動を押さえるように、文庫本で自分の胸を押さえつける。

言葉の首飾りだ。

⑫ 詠子は、頭の中に自然にわき上がったその言葉に自らおどろくと、周りのみんなにおかしいと思われぬように、そのうれしい気持ちをそっとのみ込んだ。

問一 ―線①「なるほど、と詠子は瑠璃羽ちゃんのスピーチに納得する」とありますが、詠子は瑠璃羽ちゃんの言葉になるほどと納得したのですか。本文中から十二字で探し、ぬき出しなさい。

問二 ―線②「……アタシ、別にわざとこういう格好してるわけじゃないんだよ」とありますが、次の問いに答えなさい。

(1) 「こういう格好」とは、どういう格好のことを言っていますか。答えなさい。

(2) しいちゃんはなぜ「こういう格好」をするのですか。その理由を本文中から探し、ぬき出しなさい。

問三 ―線③「自分の中の嫌なもの」とありますが、しいちゃんは、自分のどのようなところを嫌だと思っていますか。答えなさい。

問四 ―線④「詠子は今の自分の言葉がまったくお洒落ではなかったことを思い知った」とありますが、詠子はどうしてこう思ったのですか。答えなさい。

問五 ―線⑤「鶴の一声」とありますが、この語句が正しく使われているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 落ち込んでいたみんなは、母の鶴の一声で元気になった。
- イ 卒業式の先生の鶴の一声が、今でも心に残っている。
- ウ コーチの鶴の一声のせいで、試合に負けてしまった。
- エ クラス委員の鶴の一声で、クラスの出し物が決まった。

問六 ―線⑥「洋服が武器になっちゃったのか」とありますが、どのようなことを言っているのですか。本文中から探し、ぬき出しなさい。

問七 文中の 1・2 に入る言葉として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。(ただし、記号は一度だけ使うこと)

- ア くすり イ にやつ ウ ふんつ エ へらへら

問八 ―線⑦「昔の人は、同じとちがう、この二つでなにを伝えたかったんだろうね」とありますが、昔の人はなにを伝えたかったのですか。答えなさい。

問九 文中の 3 に入る最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 赤服 イ 首飾り ウ 組紐 エ 筆箱 オ 五年二組

問十 ―線⑧「その時、詠子の顔は赤かった」とありますが、このときの「詠子」の気持ちとして、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分たちがこんなにクラスみんなに注目されるとは思っていなかったので、はずかしい。
- イ しいちゃんが自分の指先をじっと観察するので、組紐を編むことが上手いはずにあせている。
- ウ 自分が考えていたようにクラスみんなが自分たちのやりとりを気にしているので、気分が高ぶっている。
- エ 自分としいちゃんのやりとりをクラスみんなが聞いているだけなので、この先どうしていいのか分からない。

問十一 — 線⑨「ひなたぼっこをした猫のような声」とありますが、それはどのような声ですか。答えなさい。

問十二 — 線⑩「詠子の胸は、とがったものをぐっと押し込まれたように痛む」とありますが、どうしてそうなったのですか。その理由を説明しなさい。

問十三 — 線⑪「みんなが言葉を編んで」とありますが、言葉にはどのような力があると言っていますか。答えなさい。

問十四 — 線⑫「そのうれしい気持ちをそっとのみ込んだ」とありますが、詠子はどのようなことがうれしかったのですか。二つ答えなさい。

問十五 — 線ア、イ、エ、オのカタカナを漢字に直し、 — 線ウの漢字をひらがなに直しなさい。

二

次の四字熟語について、 — 線のカタカナを漢字に直し、意味をア～カからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① 我田イ|ン水

② 起シヨウ|転結

③ 十人十|イロ

ア 物事や文章の組み立てのこと。

イ みんなで力を合わせる事。

ウ 自分の都合のよいようにすること。

エ 人はそれぞれ好みや考えが異なること。

オ 自分のをみんなに分け与えること。

カ 終わりがよければ、すべてがまるく収まること。

(五〇分)

1

受 験 番 号

氏 名

得点

[illegible]

問 二	
(2)	(1)

問	三

問	四

問	五

問 六

問	七
1	
2	

問	八

問 九

問 十

問 十一

問 十二

問 十三

問 十四

○

○

問 十五			
エ		ア	
	セン モン カ		キ ジ ユ ン
オ		イ	
	タ テ	め	ソ
		ウ	
		げ	告

二

①	
	イ ン
	意味
②	
	シ ヨ ウ
	意味
③	
	イ ロ
	意味